論文

バーブル文字に関する覚書

間野　英二
京都大学名誉教授

一・バーブルとバーブル文字

一五世紀末葉の中央アジアにティムール朝の王子として生まれ、アフガニスタンを経て、一六世紀前半、インドにムガル朝を創設したバーブル（ザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブル）は、勇猛な武将であり、優れた政治家であった。しかし同時に彼は傑出した文人であり、その四七年の生涯のうちに、回想録の傑作『バーブル・ナーマ』をはじめ、詩集『ディーワーン』や詩の韻律論に関する論考『アルーズ・リサーラス』、それにハナフィー派イスラーム教徒の六信五行についての解説『ムバイイン』など、少なくとも六種類の著作[1]を残している。そのため、現在バーブルの肖像画として知られるムガル朝時代の細密画には、書物を手にしたバーブルの姿を描いたものが多い（図一、図二）。これは、三〇〇年以上も続いた一大王朝の創設者の像としては異例というべきであろう。しかし、異例なだけに、それらの肖像画は書物や庭園を愛し、自らも優れた著作を残したバーブルの文人としての特徴をきわめてよく表現したものといえよう。

図1　庭園で書物を手にくつろぐバーブル
British Museum蔵

バーブルは好奇心、探究心に富んだ人物で、『バーブル・ナーマ』には中央アジア、アフガニスタン、インドにおける彼の多彩な見聞が生き生きと語られている。バーブルの関心は多岐にわたり、バーブル文字と呼ばれる新しい文字をも発明し、この文字で彼自身が書いた『クルアーン』を聖都メッカに送ったという。常に戦乱の最中にありながら、六種の著作を残したばかりでなく、新しい文字までをも発明したとは驚く他はない。

ただ、このバーブル文字についてはなお不明の点が多い。そのため筆者が『バーブル・ナーマ』の日本語による訳註[2]を出版した際も、その解題の中でこの文字については少ししか触れることができなかった。本稿は、その後に得た情報を利用して、先の訳註の記述の不備を補おうとするものである。ただし、本稿は独創性に乏しい文字通りの覚書にしかすぎない。それゆえ、本稿によって、先の訳註の欠を補うだけでなく、もしも今後のバーブル文字研究の進展に向けての何らかの手掛かりを提供できれば望外のよろこびである。

図2　書物を手にした壮年期のバーブル
British Museum 蔵

二．研究史の概略

バーブル文字についての研究史は大きく二期に分けられる。

第一期の諸研究は、バーブル文字なるものの存在が『バーブル・ナーマ』の記述などから知られてはいたが、この文字を実際に使用して書かれた文章の実例などがなお研究者に知られていなかった段階のものである。実例もなかったため、この時期の研究は少ない。それゆえ、この時期の研究については二〇世紀前半のイギリスの研究者A・S・ベヴァリッジの見解を紹介すれば十分と思われる。ベヴァリッジは『バーブル・ナーマ』の優れた英訳書[3]の中で、バーブル文字について、次のような指摘を行った。

一、『バーブル・ナーマ』の中に見えるBāburī khaṭṭ[4]（ないしBāburī khaṭṭī[5]）というチャガタイ語は、普通、バーブル文字の意味と解されている。しかしここに見えるkhaṭṭは、文字ではなく、バーブルが発明したアラビア文字の新しい優れた書体（ナスフ体などの書体）と解すべきではないか[6]。

二、バーブル文字について言及した史料としては、『バーブル・ナーマ』の他に、バーブルのいとこで、モグールの貴族であったミールザー・ハイダルが著した歴史書『ターリーヒ・ラシーディー』、ムガル朝のバーブルの孫アクバルの時代に書かれたニザームッ・ディーン・アフマド著『タバカーティ・アクバリー』とバダーウーニー著『ムンタハブッ・タワーリーフ』が挙げられる。これらの史料の記述から、バーブルがこの文字で書いた『クルアーン』をメッカに送ったこと、また、アクバルの時代にはすでにこの文字が人々によく知られていなかったことが知られる[7]。

三、他の史料としては、著者不明、書名不明の、普通『アブシュカ』と呼ばれるチャガタイ語＝オスマン語辞典[8]のスグナクSīghnāqの項に、

スグナクとは一種の文字をいう。チャガタイ語ではバーブル文字（Bāburī khaṭṭī）のごときもの。バーブル・ミールザーの詩の中に次のごとく見える。

という記述があり、そこにバーブル文字Bāburī khaṭṭīという語を含むバーブルの詩の一行（二つの半句からなる一行）が引かれている。ただし、この一行は難解で、その意味は取りにくいとベヴァリッジは記す[9]。

ベヴァリッジが研究を発表したのは二〇世紀の二〇年代であるが、その後しばらくの間、バーブル文字に関する研究は進展を見せず、ベヴァリッジの見解に対して意見を述べる研究者もいなかった。

ところが、それより約四〇年後の二〇世紀の六〇年代に研究は大きく進展し、研究史は第二期を迎えた。

一九六四年、ウズベキスタンのS・アズィムジャーノヴァはインドのニュー・デリーで開かれた第二六回国際東洋学者会議で「バーブル文字に関する新しい資料」と題する研究を英文で発表し、この研究はただちにイギリスの『中央アジア・レヴュー』誌に掲載された[10]。この論文は、ウズベク共和国（現ウズベキスタン共和国）科学アカデミー東洋学研究所が所蔵する『アジャーイブッ・タバカート』という、一七世紀の中央アジアで書かれた神秘学に関するペルシア語史料の中にバーブル文字のアルファベットが記載されていることを学界に初めて報告したものである。この論文には、『ア

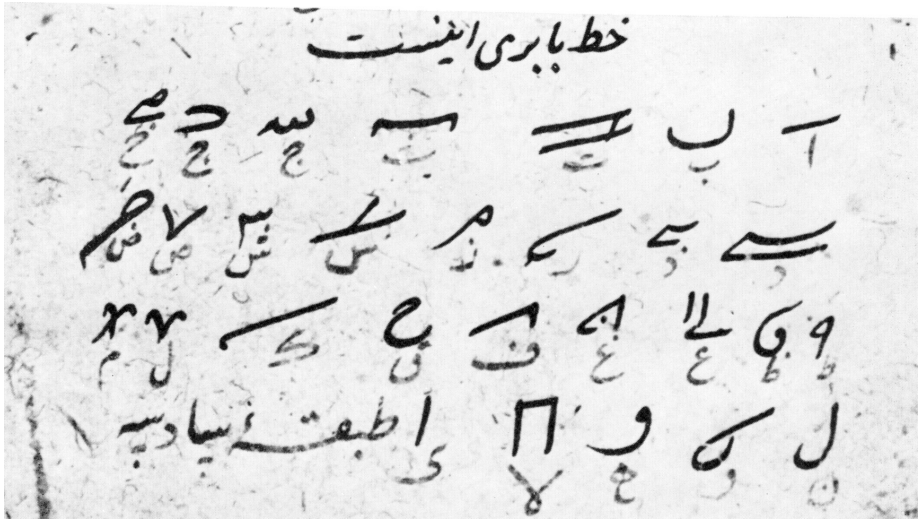


図３　『アジャーイブッ・タバカート』に見えるバーブル文字

ジャーイブッ・タバカート』の一写本（写本番号九〇四二）から採られたバーブル文字のアルファベットの写真（図三）も掲載された。この写真から、この史料には、「バーブル文字がこれである」というペルシア語の説明句に続いて、二九個のバーブル文字とされる文字が、各々に対応するアラビア文字とともに記載されていることが分かるであろう。この論文によって、従来全く知られていなかったバーブル文字の実例と思われるものが学界に初めて示されたのであり、まさに画期的な研究の出現であった。なお、アズィムジャーノヴァはこの論文の中で、Bāburī khaṭṭ の khaṭṭ とはやはり文字を意味すると考えるべきだとし、先の、書体を意味するのではないかとするベヴァリッジの見解を完全に否定した。バーブル文字の実例と思われるものが発見されては、ベヴァリッジの見解が否定されるのは当然である。

図4 『バーブルのクルアーン』の二ページ

この論文は直ちに反響を呼び、まずパキスタンのM・サービルが、同年（一九六四年）中に、その内容を英文で紹介した[11]。また、このサービルの報告を読んだトルコ共和国のR・R・アラトも、同年中に、サービルの記述に基づいてアジムジャーノヴァの研究をトルコ語で紹介した[12]。

ところが、そのわずか一年後の一九六五年、イランの文献学者A・G・マアーニーはマシュハドのイマーム・レザー廟図書館が所蔵する不明の文字で書かれた『クルアーン』がバーブル文字で書かれた『クルアーン』であるとする論文をペルシア語で発表した[13]。そしてこの『クルアーン』を『バーブルのクルアーン *Muṣḥaf-i Bāburī*』と名付け、その二ページ分の写真を不鮮明ながら掲載し（図四）、さらに、アラビア文字とこの『クルアーン』に見えるバーブル文字の対照表を示した（図五）。また、マアーニーは、この『クルアーン』には、サファヴィー朝の君主シャー・スルターン・フサイン（在位一六九四－一七二二年）のヒジュラ暦一一一九年（一七〇七年）の日付を持つワクフ・ナーマが付けられており、この『クルアーン』がフサインによって一八世紀初頭にレザー廟図書館にワクフされたものであることをも明らかにした[14]。なお、マアーニーの同じ考えは彼の『クルアーン』の解説目録でも繰り返されている[15]。この目録に見える『バーブルのクルアーン』の一ページの写真を示す（図六）。マアーニーの論文は、アズィムジャーノヴァの研究

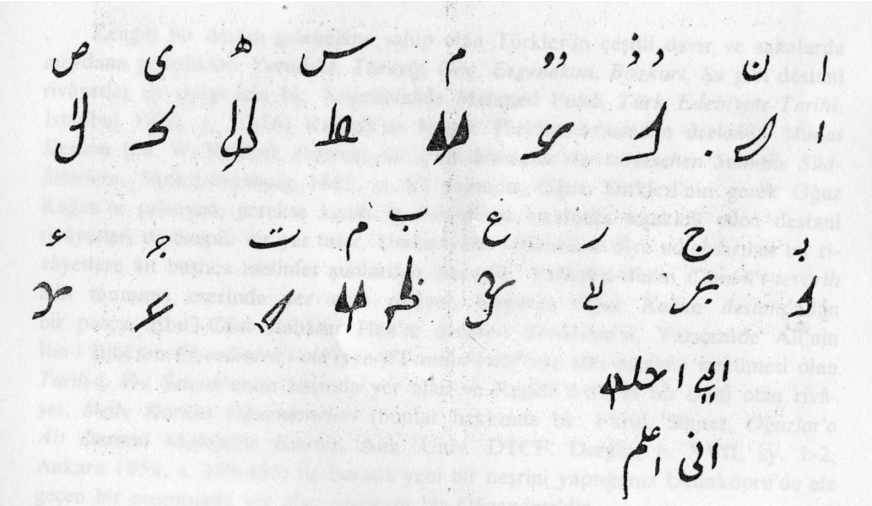


図5 マアーニーによるアラビア文字・バーブル文字の対照表

図6 『バーブルのクルアーン』の一ページ

を知らずに、それとは全く独立して発表されたものである。発表年が近いのでそれは当然である。

ところが、ここに大きな問題が発生することになる。

それは、アズィムジャーノヴァによってバーブル文字とされた二九個の文字がマシュハドの『クルアーン』に一つとして現れないという点である。二つの史料に見える文字が全く一致しないとすれば、どちらか一方がバーブル文字で、他の一方はバーブル文字ではないということにならざるをえない。どちらが真のバーブル文字なのか。以後の研究はこの点を焦点として展開された。

まず、アフガニスタンの文献学者A・H・ハビービーは一九七二年にカーブルで公刊されたペルシア語によるバーブル伝の中で、『アジャーイブッ・タバカート』に見える文字とマシュハドの『クルアーン』の文字を比較した表（図七）を掲げ、両者がまったく一致しないことを指摘し、マシュハドの『クルアーン』の文字はバーブル文字ではないと結論した[16]。

ついで、一九七六年と一九八〇年には、トルコ共和国のA・アルスランが「バーブルの発明したバーブル文字とその文字で書かれたクルアーン」と題するトルコ語の論文で、バーブル文字といわれる二種類の文字の不一致を指摘したが、どちらがバーブル文字であるかについての結論は保留した[17]。

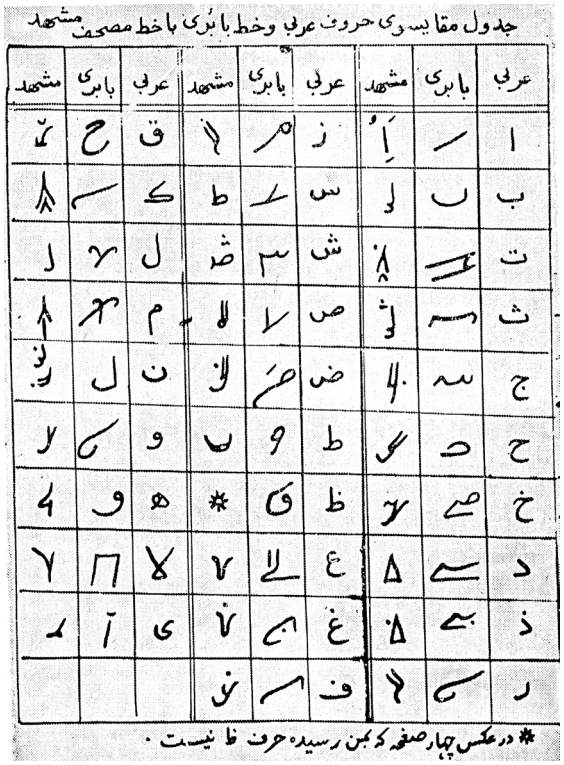


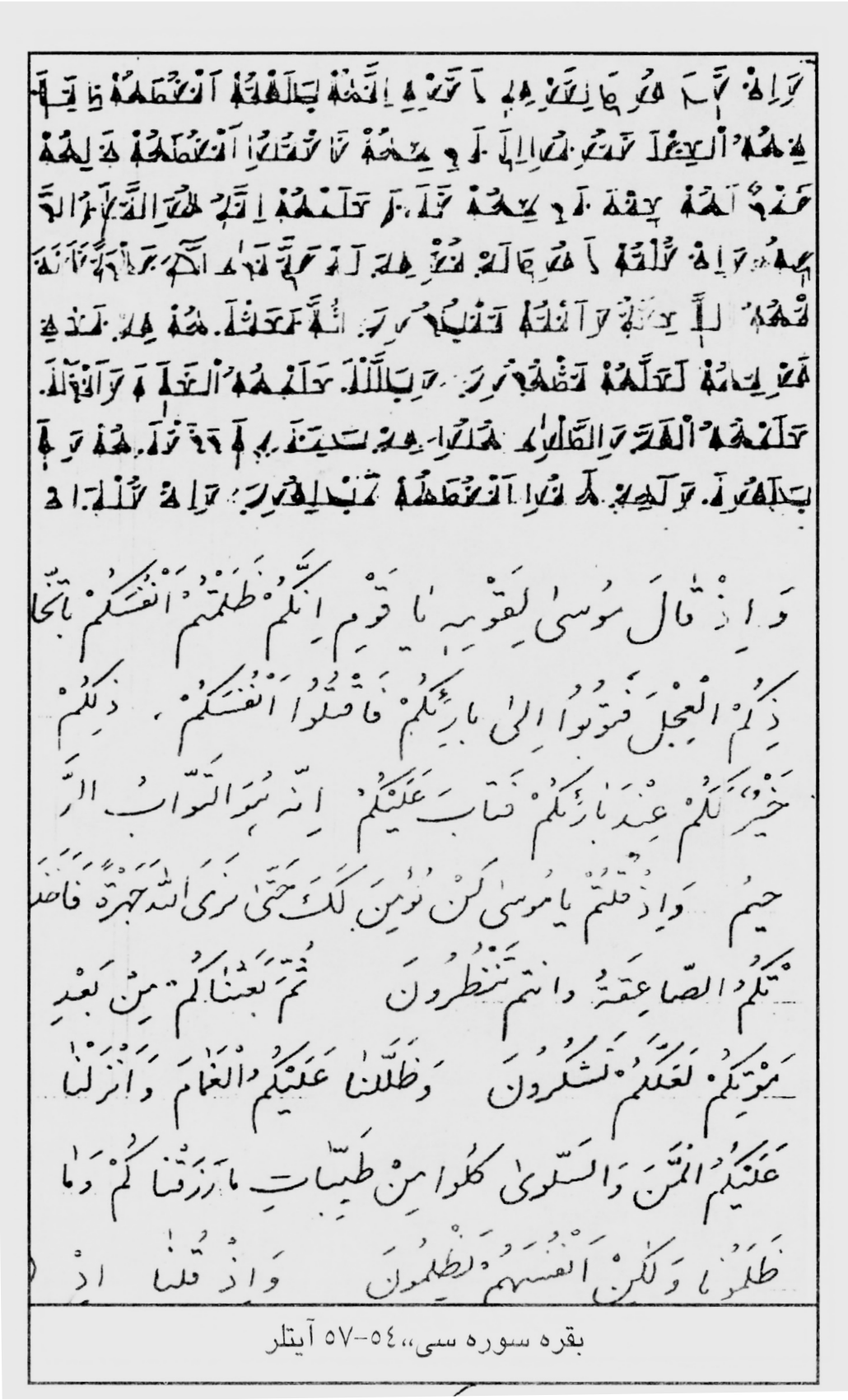
図7　ハビービーによるアラビア文字と二種のバーブル文字の対照表

その後、しばらく研究は途絶えた。しかし、二〇〇五年、アフガニスタンのカーブルで、M・H・ヤルクンによってアラビア文字を用いたウズベク語による『バーブル文字』と題する専門書が出版された[18]。この書物は本文三八ページ、図版一〇ページ、文献表四ページの小冊子ではあるが、バーブル文字に関する初めての専著であり、本稿の執筆にも大いに参照した。この書の中から、『バーブルのクルアーン』「雌牛の章」のバーブル文字の文と、それに対応する文をヤルクンがアラビア文字で記した図を示す（図八）。

この書の一つの大きな功績は、イランの書家・文字研究者のF・F・ニーシャーブーリーが一九九八年に著した、マシュハドの『バーブルのクルアーン』に関するペルシア語による研究[19]を詳しく紹介している点である。ヤルクンはこの研究のコピーを、ウズベキスタンのアンディジャーンのバーブル博物館で見ることができたという。筆者はこの研究の存在をヤルクンの書を通じて初めて知った。ヤルクンは、ファズルッラーがマシュハドの『バーブルのクルアーン』に見える文字の「読み書きの諸規則 oqish ve yazish qoidalari」を初めて解明したことを報告し、おそらくこの『クルアーン』に見える文字がバーブル文字であり、『アジャーイブッ・タバカート』に見える文字はバーブル文字ではない可能性が強いことを指摘した。

ただし、ヤルクンは、このニーシャーブーリーの詳細な研究もなお完全ではなく、バーブル文字については、次の未解決の問題が残っていることをも指摘した。ヤルクンによれば、マシュハドの『バーブルのクルアーン』にはアラビア語を記すための二九個のバーブル文字（Alif から Yā に至る二八個のアラビア文字に対応する二八個の文字とアラビア文字 Lā に対応する一個の文字）しか見えないが、本来バーブルが発明したバーブル文字には、チャガタイ語やペルシア語を記す時に使用される、純粋のアラビア文字以外の四個の文字（پ، چ، ژ، گ）に対応する四個の文字も含まれていたはずである。それゆえ、バーブル文字の全容を掌握するためには、今後、バーブル文字の、これらの四文字をも含む、チャガタイ語、ないしペルシア語の文章の実例を発見し、バーブル文字の文字表を完成することが必要である。

ヤルクンのこの指摘は重要である。しかし、現在に至るまで、そのような文章の実例は発見されていない。もしそのような文章がどこかで発見されれば、バーブル研究者の間で大きな反響を呼ぶことは必定であろう。



وَإِذْ قَالَ مُوسَىٰ لِقَوْمِهِ يَا قَوْمِ إِنَّكُمْ ظَلَمْتُمْ أَنفُسَكُم بِاتِّخَا
ذِكُمُ الْعِجْلَ فَتُوبُوا إِلَىٰ بَارِئِكُمْ فَاقْتُلُوا أَنفُسَكُمْ ۚ ذَٰلِكُمْ
خَيْرٌ لَّكُمْ عِندَ بَارِئِكُمْ فَتَابَ عَلَيْكُمْ ۚ إِنَّهُ هُوَ التَّوَّابُ الرَّ
حِيمُ وَإِذْ قُلْتُمْ يَا مُوسَىٰ لَن نُّؤْمِنَ لَكَ حَتَّىٰ نَرَى اللَّهَ جَهْرَةً فَأَخَذَ
تْكُمُ الصَّاعِقَةُ وَأَنتُمْ تَنظُرُونَ ثُمَّ بَعَثْنَاكُم مِّن بَعْدِ
مَوْتِكُمْ لَعَلَّكُمْ تَشْكُرُونَ وَظَلَّلْنَا عَلَيْكُمُ الْغَمَامَ وَأَنزَلْنَا
عَلَيْكُمُ الْمَنَّ وَالسَّلْوَىٰ كُلُوا مِن طَيِّبَاتِ مَا رَزَقْنَاكُمْ ۖ وَمَا
ظَلَمُونَا وَلَٰكِن كَانُوا أَنفُسَهُمْ يَظْلِمُونَ وَإِذْ قُلْنَا ادْ

بقره سوره سی،، ٥٤-٥٧ آیتلر

図８　『バーブルのクルアーン』「雌牛の章」

三．バーブル文字に関する史料

この章では、バーブル文字研究のために、研究者たちによって利用されてきたバーブル文字に関する諸史料とその内容を具体的に示したい。

一　『バーブル・ナーマ』

『バーブル・ナーマ』には三か所にバーブル文字についての言及がある。まず、一五〇四年秋の記述として、

> まさにこの頃（カーブル征服の頃）、私はバーブル文字Bāburī khaṭṭを発明した。（『校訂本』二二四ページ）

と見える。ここには、このように述べられているのみで、バーブルが、なぜ、何を目的に、新しい文字を発明したかについては何も語られていない。

次に、一五〇六年、バーブルがティムールの一族を結集しての対ウズベク戦に参加するためカーブルからヘラートに赴いた際、その往路、ムルガーブ河畔で親族であるティムール家の王子らと会見したが、その際のこととして、君主スルターン・フサイン・ミールザー治下のヘラートで活躍した学者（ウラマー）の一人カーズィー・イフティヤールについて、

> 次はカーズィー・イフティヤールであった。（中略）私がムルガーブでミールザーたち（ティムール家の王子たち）に会った時、ミールザーらはカーズィー・イフティヤールとムハンマド・ミール・ユースフと共に来て私に会った。バーブル文字Bāburī khaṭṭiについて話が出た。彼（カーズィー・イフティヤール）は一字一字についての説明（mufradāt）を求めた。私はそれを書いた。その会合で、彼はその説明（mufradāt）を読み、原則（qavā'id）を理解して何事かを書きとめた。（『校訂本』二七八ページ）

と記している。この記事から、ヘラートにも発明されたばかりのバーブル文字について関心を抱く者がおり、この文字が説明されればその原則を理解できる、それほど学習が難しい文字ではなかったことを推測できる。

また、インド征服後の一五二九年の記述の中に、バーブルの長男フマーユーンの息子の誕生祝いとバーブルの次男カームラーンの結婚祝いのため、バーブルがこの二人に様々な贈り物をしたことを記した後に、

> ムッラー・ベヘシュティーを通じて、（バーブルの三男）ヒンダルに、金をちりばめたベルト付き短剣、金をちりばめた筆箱、真珠貝をちりばめた椅子、私が着用していた短い上着と絹の腰帯、バーブル文字の説明（Bāburī khaṭṭi-ning mufradāti）とバーブル文字で私が書いた断片（Bāburī khaṭṭi-bilä bitilgän[20] qit'alar）を送った。
> フマーユーンに、私がヒンドゥスターンに来てから作った翻訳[21]と詩を送った。ヒンダルと（バーブルの臣下で友人の）ホージャ・カラーンにも翻訳と詩を送った。ミールザー・ベグ・タガーイーを通じ、カームラーンにも翻訳とヒンドに来て以来作った詩とバーブル文字で私が書いた宛名書き（Bāburī khaṭṭi-bilä bitilgän sar-i khaṭṭlar）を送った（『校訂本』五七一ページ）。

とあり、バーブルが、バーブル文字に関する説明や、バーブル文字で書いた詩の断片などを息子たちに送っていたことが知られる。

バーブル文字について、現存の『バーブル・ナーマ』には以上の記事しか見えない。バーブル文字で書かれた『クルアーン』のメッカへの送付という重要な一件（この件については本章の三参照）に関する記述は現存する『バーブル・ナーマ』には見えない。その理由は、それが書かれていた『バーブル・ナーマ』の部分が今は散逸して[22]見られないためと思われる。

二　バーブルの詩の一行

先に、ベヴァリッジの研究の紹介の中で触れたように、バーブル文字という語が含まれる、バーブルのチャガタイ語の詩の一行（一バイト）が存在する。ベヴァリッジは、この詩の一行が『アブシュカ』と呼ばれる辞典に見えることを指摘したが、現在ではこの一行がバーブルの詩集『ディーワーン』にも収録されていることが明らかとなっている[23]。この一行をSh・ヤルクンの出版した『ディーワーン』に見えるアラビア文字テキストのローマ字転写と、この一行の日本語による試訳を示すと、以下のごとくである。

Türklär khaṭṭı naṣıbing bolmasa Bābur ni tang
Bābur khaṭṭı emästür khaṭṭı Sıghnaqī durur[24]

テュルク人らの文字をお前が習得していないなら、バーブルよ、何と素晴らしいことか。
（テュルク人らの文字というのは）バーブル文字のことではない、スグナク文字のことである。

この詩にスグナク文字khaṭṭ-ı Sıghnaqīとして見えるスグナクは、W・バルトリドによれば、中央アジアの町の名前で、シル河下流域のジャンドとファーラーブの間にあり、モンゴル時代にもテュルク系の異教徒キプチャク人らの活動の中心地であったという[25]。おそらくこの町で作られ、この方面で使われていた文字がスグナク文字であろう。スグナク文字については、一八世紀の前半、アフシャール朝時代のイランでミールザー・マフディー・ハーンが著したチャガタイ語＝ペルシア語辞典『サングラーフ』のスグナクの項[26]に、スグナクには二つの意味があり、一つは「隠れ家、避難所」で、

二つ目は一種の文字である。バーブル・パーディシャーが次のように詠んでいるがごとくである。

と述べて、先の詩の一行を挙げている。ただし、『サングラーフ』に挙げられているこの一行の冒頭と末尾は、『ディーワーン』に見えるTürklär、durur という語形式とは異なり、khūblar、および mu dur となっている。この語形式は、注二四で挙げた、『アブシュカ』や『東方トルコ語辞典』に見える語形式と同じである。しかし『サングラーフ』の語形式は、『サングラーフ』が『アブシュカ』を参照し、その誤りを踏襲したために起こった誤りで、やはり『ディーワーン』に見える語形式を正しいものと見るべきであろう。

なお、『アブシュカ』や『サングラーフ』に見える情報から、スグナク文字と呼ばれる文字がバーブルの時代まで知られていたことは確かであろう。しかし、現在、その実例はまったく知られておらず、それがどのような文字であったかは不明である。そのため、ベヴァリッジも述べたように、バーブルのこの詩の一行は、その意味するところを理解するのが容易ではない。

M・H・ヤルクンは、この詩の一行については二通りの解釈が可能だとし、その意味するところは、①バーブルが、テュルク人らの文字、つまりスグナク文字が流通していないのを残念に思っており、バーブル文字がテュルク人らの文字として流通すればよいのにという希望を伝えたもの。②バーブルが自ら発明したバーブル文字が流通していること、そしてこの文字が、スグナク文字のように、テュルク人らの文字としてテュルクの諸民族によって使われていることの喜びを述べたもの、であろうと述べた[27]。

しかし筆者には、このヤルクンの解釈には問題があり、これとは別の解釈も可能に思われる。筆者は現在のところ、この詩は、テュルク人らの間で流通していた文字、つまりスグナク文字をバーブルが習得せず、それとは異なるバーブル文字を発明したことの素晴らしさを述べたものではないかと考えている。しかし、現在、我々がスグナク文字なるものについての知識を欠く以上、この詩の一行の正確な理解はなお将来の課題として残すべきであろう。

三　『タバカーティ・アクバリー』『ムンタハブッ・タワーリーフ』

バーブルの孫で、ムガル朝第三代の皇帝アクバルの治世第三八年（一五九三年）までのインド史で、後の多くの史書にも利用されたニザームッ・ディーン・アフマド（一五九四年歿）の『タバカーティ・アクバリー』[28]には、

彼（バーブル）は文字を発明し、その文字はバーブル文字と呼ばれていた。彼はその文字で『クルアーン muṣḥaf』を書き、偉大なるメッカへ送った。

という貴重な記事が見える。

また、バダーウーニーによって一五九六年に完成されたアクバルの治世第四〇年までのインド史である『ムンタハブッ・タワーリーフ』の第一巻には、

亡きかのパードシャー（バーブル）の驚くべき発明の一つはバーブル文字である。彼は一巻の『クルアーン muṣḥaf』をその文字で書き、偉大なるメッカに送った。

とある[29]。バダーウーニーが『タバカーティ・アクバリー』を利用したことは明らかであろう。

さらに『ムンタハブッ・タワーリーフ』の第三巻の、アクバル時代に活躍

した貴族・詩人・聖者・学者らの列伝の項に見えるミール・アブドゥル・ハイイ・マシュハディーの小伝には、次のように記されている[30]。

ミール・アブドゥル・ハイイはバーブル文字をよく知っていた。バーブル文字というのは、バーブル・パーディシャーが発明し、『クルアーン muṣḥaf』をその文字で書いて偉大なるメッカへ送り、その痕跡が現在は残っていない文字のことである。ミール・アラーウッ・ダウラのタスキラ[31]には、「先のミール（ミール・アブドゥル・ハイイ）は名声を獲得した。何びとも、書くのが難しいバーブル文字を、彼よりもより迅速に、よりよく覚えた者はいなかった」と書かれている。しかしミールザー・アズィーズ・コカ[32]はその（タズキラの）欄外に、「彼（ミール・アブドゥル・ハイイ）はどのような学問でも成果を得られなかった。彼の持つ才能はバーブル文字を知っていることだが、この文字もよくは知らなかった」と書いている。

この記述から、ミール・アブドゥル・ハイイがバーブル文字についての知識を持っていたことが知られるが、彼の持ったバーブル文字の知識の多寡については相反する情報があったことがわかる。この問題について、著者バダーウーニーは、先の記述に続いて、

ミール・アブドゥル・ハイイはより早くからミールザー（ミールザー・アズィーズ・コカ）の知人になっていたので、ミールザーが書いたことが明らかに真実に近い。ミール・アラーウッ・ダウラには（事実と）相反する情報が多い。

という見解を加えている。従ってミール・アブドゥル・ハイイがバーブル文字をよく知っていたか否かには問題があるが、少なくともアクバルの時代にバーブル文字を知る者がすでに少なかったことは明白であろう。さらに、バーブル文字はこのころになるとすでに「書くのが難しい」文字となっていたことも明らかである。

四　『アジャーイブッ・タバカート』

アズィムジャーノヴァがバーブル文字に関する史料として初めて学界に報告した『アジャーイブッ・タバカート』について、一九九八年に刊行された『ウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋写本集成　精密科学・自然科学』[33]の記述に依拠して説明したい。なお、アズィムジャーノヴァは科学アカデミー東洋学研究所には『アジャーイブッ・タバカート』の一四種の写本が存在すると記したが、この目録には一六種の写本が挙げられている。ただ、そのうち、写本番号一九九三／一という一写本はバーブル文字を欠くという。

著者のムハンマド・ターヒル・イブン・アブル・カースィム・バルヒーは、中央アジアのアシュタルハーン朝時代の天文学者、地理学者で、アシュタルハーン朝のナズル・ムハンマド・ハーン Naḍr[34] Muḥammad Khān（在位一六四二年－一六四五年）の時代にブハーラで活動し、ハーンに『アジャーイブッ・タバカート』を献呈した。

『アジャーイブッ・タバカート』は七章からなり、第一章地と天、第二章歴史、第三章七気候帯、第四章動物、第五章神秘学、第六章驚異の実例、第七章死からの復活とマフディーの到来、である。そして第六章に、いろいろの時代に科学の神秘を守るために人々が発明した不思議な九種の文字（月文字 khaṭṭ-i qamar、王文字 khaṭṭ-i shāhī など）（図九）を列挙し、その最後の九番目に「バーブル文字がこれである（ないし、「この文字がバーブル文字である」）」と記して、二九の文字を挙げている。

『アジャーイブッ・タバカート』が執筆されたのは一七世紀中葉の中央アジアである。本章の一、三で史料を示したように、バーブル文字は一六世紀初頭にアフガニスタンのカーブルで発明された。しかしおよそ一〇〇年後のアクバル時代のインドには、すでにこの文字の痕跡はほとんど残らず、書くのも難しい文字と思われていた。この点を考慮すると、アクバル時代よりさらに約五〇年が経過した一七世紀の中央アジアにバーブル文字が正確に伝えられており、その正しいバーブル文字が『アジャーイブッ・タバカート』に採録された可能性はかなり低いと思わざるをえない。マシュハドの『バーブルのクルアーン』に見えるバーブル文字が、『アジャーイブッ・タバカート』の文字と全く一致しないという事実もこの推測を補強する。筆者も現在のところ、『アジャーイブッ・タバカート』に見えるバーブル文字はバーブル文字とは全く別の文字であるか、それとも、もともとはバーブル文字であったとしても、時が経つうちに、誤った形に改変されて伝えられたものであろうと考えている。

Manuscrit de Ahmad Danich.

図９ 『アジャーイブッ・タバカート』一写本に見える神秘の諸文字

五　『バーブルのクルアーン』

マアーニーによって、バーブル文字で書かれた『クルアーン』と推定されたマシュハドの『クルアーン』は、カシュミール紙に書かれ、章名や最初の二ページなどには金が用いられているという。付載されたワクフ・ナーマが記すように、サファヴィー朝の君主フサインが一八世紀初頭にレザー廟にワクフしたものである。それゆえ、この『クルアーン』は、それ以前はサファヴィー朝の宮廷図書館に所有されていたものと思われる。

ただし、この『クルアーン』のどこにも、それがバーブル文字で書かれたものであるとは記されていない。それをマアーニーやヤルクンがバーブル文字による『クルアーン』であると推定する理由は、以下のごとくである。

①バーブルがバーブル文字で『クルアーン』を書き、それをメッカに送ったという史実がある。

②バーブルとサファヴィー朝はきわめて密接な関係にあった。実際、バーブルは一五一一年に、サマルカンドに進撃するため、サファヴィー朝の君主イスマーイールに援軍を求め、その援助を得てサマルカンド征服に成功した。また、一五一二年にもサファヴィー朝の援軍を得ている。この時のバーブルのサマルカンド支配はウズベクの反撃を受け短期間に終わり、結局バーブルはアフガニスタンへの退却を余儀なくされた。しかし、サファヴィー朝との密接な関係はバーブルを継いだフマーユーンの時代まで続き、フマーユーンは一時サファヴィー朝の君主タフマースブのもとに亡命した。

③これらの状況から考えると、バーブルがバーブル文字で書いた『クルアーン』をサファヴィー朝の君主イスマーイールに贈っていた可能性[35]、あるいはフマーユーンがバーブル文字で書かれた『クルアーン』を君主タフマースブに贈っていた可能性が十分にあるといえるであろう。また、バーブルがメッカに送った『クルアーン』が、メッカに到達せず、途中でサファヴィー朝の有に帰した可能性も考えられる。

以上のように、マシュハドの『クルアーン』がバーブル文字で書かれた『クルアーン』であるとするのは、あくまでも状況証拠に基づくものである。根拠は決定的なものでなくなお問題は残るが、現在のところ筆者も、この『クルアーン』に書かれた文字がバーブル文字である可能性が強いと考えている。

四．結びに代えて

以上述べたところを整理し、残された課題を述べれば、次のごとくである。

一　バーブルは、一五〇四年、アフガニスタンのカーブルで、バーブル文字を発明した。この文字は、アラビア文字に対応する、アラビア語用の二九文字とチャガタイ語・ペルシア語用の四文字の計三三文字から構成されていたと考えられる。ただし、この四文字がどのような形であったかはなお不明である。そのため、ヤルクンが指摘したように、この四文字が使われた文章の実例の発見が今後の課題となる。

二　バーブルはこの文字を使って、チャガタイ語（あるいはペルシア語）で詩の断片、宛名書きなどを書いて、息子たちに送った。さらにこの文字で書いた『クルアーン』をメッカに送った。

三　現在、イランのマシュハドのイマーム・レザー廟図書館にはこのバーブル文字で書かれた可能性の高い『クルアーン』が所蔵されている。この『クルアーン』は、一八世紀初頭、サファヴィー朝の君主フサインによってレザー廟にワクフされたもので、もともとはサファヴィー朝の所有物であった。

四　このマシュハドの『クルアーン』は、バーブル、ないしその子フマーユーンによって、彼らと関係の深かったサファヴィー朝に寄贈されたものである可能性が高い。ただ、バーブルがメッカに送った『クルアーン』がメッカに到達せず、途上でサファヴィー朝の有に帰していた可能性もある。

五　現在、タシュケントの科学アカデミー東洋学研究所が所蔵する『アジャーイブッ・タバカート』にバーブル文字として見える文字は、バーブル文字ではなく、同書に記載された他の八種の文字と同様、秘密の文字の一つである可能性が強い。もっとも、それらがもともとはバーブル文字であった可能性もあるが、もしそうであったとしても、時が経つうちに、本来のバーブル文字とは異なった形に改変されて伝えられたものと考えられる。

六　バーブルが何のために新しい文字を発明したのかは明らかでない。この文字が、内密の要件などを伝えるための暗号的な文字であった可能性は、バーブルがこの文字についてヘラートで一学者に説明したり、この文字で詩の断片などを書いて息子たちに送ったりしていることから否定される。

バーブルがこの文字で書いた『クルアーン』をメッカに送ったということ

から、バーブルが自ら発明した文字で『クルアーン』を写し、それをメッカに送ることによって、イスラームに対する自らの真摯な信仰心を内外に示すのが目的であった可能性も考えられる。もしそうであれば、この文字は『クルアーン』など宗教関係の文のみを写すために、特に作られたものと考えなければならないであろう。しかし、この文字で宗教とは無関係の詩の断片なども書かれているため、この考えも否定される。マアーニーは、バーブルが気晴らし（tafannunī）のためにこの文字を作ったと考えた[36]。しかし、バーブルはもともと政務や軍事行動で多忙な上に、著作のほか庭園造営や飲酒、景勝地の散策など多くの趣味を持ち、それらのために寸暇を割いていた。そのようなバーブルに文字の発明という新しい「気晴らし」が必要であったであろうか。答えは否であろう。新文字の作成には別の何らかの明確な理由があったはずである。この理由の解明は今後の大きな研究課題の一つである。

七　バーブル文字は、バーブルの時代、人に説明すればすぐに理解される、むしろ学習しやすい文字であったと思われる。それは、バーブル文字がアラビア文字に対応する文字であり、さらにアラビア文字のクーフィー体やナスフ体にも似たところのある文字であった[37]ためと考えられる。しかし、孫のアクバルの時代になると、バーブル文字はすでに難しい文字と思われており、この文字の読み書きを知る者はもはや特別な存在となっていた。おそらく、この文字は発明されたものの、社会にはほとんど流通しなかったため、その読み書きの規則も徐々に忘れられていったものであろう。

八　バーブルがバーブル文字という新しい文字を発明したという事実は、バーブルが多方面に関心を抱く人物であったことをよく物語る。世界史上、君主という立場にありながら、新しい文字を発明した者はおそらくバーブル以外にはないであろう。バーブル文字についてはなお不明の部分も多く残るが、この文字の発明という一事を通じても、バーブルという一人の人間に対する興味がますます深まるのである。

【註】

(1)バーブルは、その他に、音楽や戦争技術に関する著書をも著したが、現在は散逸して見られないという説もある。Shafīqa Yārqīn (1362/1983), *Dīvān-i Ẓahīr al-Dīn Muḥammad Bābur*, Kabul: Akādemī-yi ʻUlūm-i JDA, p. 155.

(2)間野英二（一九九八）『バーブル・ナーマの研究　Ⅲ　訳注』松香堂。

(3)Annette Susannah Beveridge (1922; 1969) *The Bābur-nāma in English (Memoirs of Bābur)*, 2 vols., London: Luzac & Company LTD.; Repr. in 1 vol., London: Luzac & Company LTD.

(4)間野英二（一九九五）『バーブル・ナーマの研究　Ⅰ　校訂本』松香堂、二二四ページ。本書を、以下『校訂本』と略称する。

(5)『校訂本』、二七八ページ、五七一ページ。

(6)Annette Susannah Beveridge (1922; 1969), Appendices, p. lxii.

(7)Annette Susannah Beveridge (1922; 1969), p. 228, note 3; Appendices, pp. lxii-lxiv.

(8)十六世紀前半の作品。辞典の冒頭に現れる語がAbushqaであるため『アブシュカ』と呼ばれる。V. de Véliaminof-Zernof (1869), *Dictionnaire djagatai-turc*, St. Pétersbourg: Académie Impériale des Sciences, p. 278.

(9)Annette Susannah Beveridge (1922; 1969), Appendices, p. lxiii.

(10)S. Azimdzhanova (1964), "New Data concerning Khatt-i Baburī," *Central Asian Review*, Vol. 12, No. 2, pp. 149-155. この論文は、後にフランス語にも翻訳されている。S. Azimjanova (1985), "Données nouvelles sur l'écriture Baburī," in Jean-Louis Bacqué-Grammont, *Le livre de Babur. Mémoires du premier Grand Mogol des Indes (1494-1529)*, Paris: Imprimerie nationale, 1985, pp. 351-356.

(11)Muḥammad Sābir (1964), "Baburī Script," *Dawn*, Vol. 23, no. 29, Karachi.

(12)Reşid Raḥmetī Arat (1964), "Babūr ve yazısı," *Türk Kültürü*, 17, pp. 18-21.

(13)Aḥmad Gulchīn Maʻānī (1344/1965), "Muṣḥaf-i Bāburī," *Nāma-yi Āstān-i Quds*, 20, Mashhad, pp. 60-64.

(14)マアーニーは、このワクフ・ナーマには、この『クルアーン』が一二イマーム派のイマームの一人（おそらく第七代イマーム）によって書かれた可能性があるという誤った推測が記されていることをも注記した。

(15)Aḥmad Gulchīn Maʻānī (1347/1969), *Rāhnumā-yi ganjīna-yi Qur'ān*, Mashhad: Idāra-yi Kitābkhāna-yi Āstān-i Quds, pp. 178-184.

(16)ʻAbd al-Ḥayy Ḥabībī (1351/1972), *Ẓahīr al-Dīn Muḥammd Bābur Shāh (6 muḥarram 888-6 jumādā al-awlā 937 h.)*, Kabul: Mu'assasa-yi Bayhaqī, pp. 75-78.

(17) A. Alparslan (1976; 1980), "Babur'un icad ettiği《Baburî yazısı》ve onunla yazılmış olan Kur'an," *Türkiyat Mecmuası*, Vol. 18, pp. 161-168; Vol. 19, pp. 207-211.

(18) Muḥammad Ḥalīm Yārqīn (1384/2005), *Baburī Khaṭ*, Kabul: Mu'assasa-yi Intishārāt al-Azhar.

(19) Faḍlallāh Fāḍil Nishābūrī (1377/1998), *Ravish-i tabqīq dar qur'ān-i Baburī*, zīr-i naẓar-i Ustād-i Asad Allāh Āzād, Mashhad.

(20) 動詞 bitilgän の語根 bitil- は動詞 bit-（書く）の受動形であるが、バーブルは一人称の記述に受動形を使用した。従って、bitilgän は、「書かれた」の意味ではなく「私が書いた」の意味である。

(21)「翻訳」とは、バーブルの名付け親でもあったナクシュバンディー教団の首長ホージャ・ウバイドゥッラー・アフラールのペルシア語による教団の教義の説明『父のための小論 *Risāla-yi Wālidiyya*』のバーブルによるチャガタイ語韻文による翻訳『ワーリディーヤ・リサーラス』を指すと思われる。『ワーリディーヤ・リサーラス』については、Eiji Mano (2006), "On the Persian Original *Vālidiya* of Khwāja Aḥrār," *History and Historiography of post-Mongol Central Asia and Middle East: Studies in Honor of Professor John E. Woods* ,Edits. Judith Pfeiffer and Sholeh A. Quinn in Collaboration with Ernest Tucker, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, pp. 250-266 参照。

(22)『バーブル・ナーマ』にはもともと、一四九四年に始まり一五二九年に至る足かけ三六年間の出来事が記述されていたはずである。しかし、現存する『バーブル・ナーマ』の諸写本では、この内の約一六年分の記事が欠けている。大きな欠落部のみをあげると、一五〇八年の途中から一五一九年に至る約一〇年間の記述、また一五二〇年の途中から一五二六年に至る約五年一〇カ月間の記述である。すなわち、現在私たちが手にすることのできるのは、本来あったはずの三六年分の記述の内の約二〇年分の記述にしか過ぎない。

(23) この一行はバーブルの『ディーワーン』には、バーブルが作った六行からなるガザル（抒情詩）の最終行に見える。Shafīqa Yārqīn (1362/1983), p. 23; Bilâl Yücel (1995), *Bâbür Dîvânı (Gramer-Metin-Sözlük-Tıpkıbasım)*, Ankara: Atatürk Kültür Dil ve Yüksek Kurumu, p. 170.

(24) この一行の冒頭の語は、『アブシュカ』やこの辞典をも利用して作られたパヴェ・ド・クルテイユの『東方トルコ語辞典』(Abel Pavet de Courteille (1870;1972), *Dictionnaire Turk-Oriental*, Paris: L'imprimerie Imperiale; Repr., Amsterdam: Philo Press, pp. 368-369.) では Turklär ではなく、khublar となっており、最後の語は durur ではなく mu dur となっている。しかし『ディーワーン』に見える、Türklär durur が正しい語形式と思われる。

(25) W. Barthold (1928; 1968), *Turkestan down to the Mongol Invasion*, London: Luzac & Company LTD; Third ed., London: Luzac & Company LTD, p. 179.

(26) Sir Gerard Clauson (1960), *Sanglax. A Persian Guide to the Turkish Language by Muhammad Mahdī Xān*, London: Luzac & Company LTD, 254r; Ravshan Khiyāvī (1374/1995), *Sanglākh. Farhang-i turkī ba-fārsī ba-zabān-i turkī az sada-i dawāzdah hijrī*, Tehran: Nashr-i Markaz, p. 180.

(27) Muḥammad Ḥalīm Yārqīn (1384/2005), pp. 12-13.

(28) *The Tabaqāt-i-Akbarī of Khwājah Nizāmuddīn Aḥmad*, Edit. B. De, Vol. 2, Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1927, p. 27. なお『タバカーティ・アクバリー』などのムガル朝時代の史書については、近藤治『ムガル朝インド史の研究』（京都大学学術出版会、二〇〇三年）の別章2「ムガル朝インド史の史料文献」が詳しい。

(29) 'Abd al-Qādir Badā'ūnī, *Muntakhab al-Tavārikh*, Edit. Mavlavī Aḥmad 'Alī Ṣāḥib, Vol. 1, Tehran: Anjuman-i Āthār va Mafākhir-i Farhangī, 1380/2001, p. 236.

(30) 'Abd al-Qādir Badā'ūnī, *Muntakhab al-Tavārikh*, Edit. Mavlavī Aḥmad 'Alī Ṣāḥib, (Vol. 3), Tehran: Anjuman-i Āthār va Mafākhir-i Farhangī, 1379/2000, p. 187.

(31) このタズキラの書名は『ナファーイス・ル・マアースィル *Nafāyis al-Ma'āthir*』である。大英図書館にもその一写本（Or. 1761）が所蔵されている。Charles Rieu (1883), *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, Vol. 3, London: British Museum.

(32) ミールザー・アズィーズ・コカはアクバルの乳兄弟で、コカ Kūka とはチャガタイ語 Kökeltash「乳兄弟」の略語である。彼の事績については『イスラーム百科事典』、第二版、Mīrzā 'Azīz "Kōka" の項参照。

(33) *Sobranie vostochnykh rukopiseĭ Akademii nauk respubliki Uzbekistan. Tochnye i estestvennye nauki*, Edit. A.B. Vil'danova, Tashkent: «Fan» Akademii Nauk Respubliki Uzbekistan, 1998, pp. 173-175. この目録はウルンバーエフ Asom Urunbaev 教授から寄贈を受けた。記して謝意を表する。

(34) アズィムジャーノヴァはナディル Nadir、ヤルクンはナドゥル Nadr とするが、C.E. Bosworth (1996), *The New Islamic Dynasties. A chronological and genealogical manual*, Edinburgh: Edinburgh University Press, p. 290 によって、ナズル Nadhr とする。

(35) ただし、現存の『バーブル・ナーマ』には、このことが書かれていた可能性のある年に関する部分が欠けている。注二二参照。

(36) Aḥmad Gulchīn Ma'ānī (1344/1965), p. 64.

(37) バーブル文字の、クーフィー体、ナスフ体のアラビア文字との類似性については、Muḥammad Ḥalīm Yārqīn (1384/2005), p. 36 参照。